



2022年3月

3月になり、寒さは続いていますが、だいぶ日の長さが長くなってきましたね。これからは徐々に温かくなっていくことを期待したいです。

今回ご紹介するのは、平安時代～鎌倉時代に描かれたとされる私が好きな“ある絵巻”の解説書です。ここにも動物たちが登場します！マンガやアニメの原点とも言われる鳥獣戯画。分かりやすく説明をしている『謎解き鳥獣戯画』芸術新潮編集部編 新潮社 2021をおすすめしたいと思います。「紙本墨画鳥獣人物戯画」は、甲・乙・丙・丁の4巻からなる絵巻物です。4巻合わせると、全長44メートル50.8cm。切られて絵が繋がっていないところもあります。4巻の内容は、それぞれ違い、鳥獣だけでなく、丁巻のように人間を中心に描いているものもあります。筆者・鑑賞者・注文主のいずれも不明です。文字がなく、絵のみのため、意味が分かりにくく、主題について定説はないのだそうです。伝来したのは、絵巻物に印が押されていて知っている人もいますが、京都市にある高山寺です。ちなみに、「高山寺」の印は、継なぎ目の糊が自然に弱くなってはがれやすくなった時に、意図的に絵を抜き取られるのを防ぐため、継なぎ目にまたがるように押されているのだそうです。

主に、甲巻は、擬人化された動物が描かれ、乙巻は、擬人化されていない動物が描かれています。甲巻は、兔、猿、蛙や鹿、狐、猪、猫、鼠、雉、鼬（イタチ）、梟（フクロウ）の11種。乙巻は、馬、牛、鷹、犬、鶏、鷲、隼（ハヤブサ）、犀（サイ）、麒麟、豹、山羊、虎、獅子、龍、象、猿の16種類が登場します。お気づきの方もいるかもしれませんが、甲と乙は同じ動物が登場しないのです！丙は、前半が人物で、後半が擬人化された動物と半々に登場します。丁巻は動物が描かれず、人間のみ描かれています。しかも、甲巻で描かれていた動物の絵を、丁巻では人間で描いたパロディーのものがあるのです。

この本を読むと、もともと鳥獣戯画に興味のあった人も興味なかった人もきっと楽しめると思います。文字がなく、テーマが限られているわけではないので、自分なりに解釈をして楽しんでみるのも面白いのではないのでしょうか。特に、同じ場面を描いている下記の甲巻と乙巻の比較は、特に面白いのでチェックしてみてください。

《甲巻と乙巻を見比べてみるのも面白いですよ！》（p104～p105一部抜粋）

- ①ご本尊は、甲巻が蛙なのに対し、丁巻は虫のような絵の掛け軸
扇を持って読経する僧は、甲巻が兔なのに対し、丁巻は僧侶
もう一人の読経の僧は、甲巻がお経の巻物を広げて真面目に読経する狐に対し、丁巻では紙を広げて鼻をかむ僧侶
泣く聴衆では、甲巻が猿なのに対し、丁巻では人
市女笠を被った聴衆では、甲巻が狐なのに対し、丁巻では顔が見えないくらい深く被った人

など

